

---

# 愛とまことのストーリー

青い絵 八代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛とまことのストーリー

### 【Nコード】

N0586F

### 【作者名】

青い絵 八代

### 【あらすじ】

主人公は探偵ロス。はじめは刑事者の事件を担当するが、依頼者の友人シャルックイックの登場でいじめを主とした新しいストーリーがはじまる。愛があればかなうそうというストーリー。

## 探偵のさが

現代ではいじめというものはいたずらのなれ果ての姿である。こんな小説を書いてしまうほど僕は馬鹿である。実はこれは探偵といじめの最後のストーリーである。

名前は……ロス。

200X年 謎の多いクレーザー街。

「ロス！ いるなら返事をしろ」

ガチャ。

「なんだね、こんな朝早く。まさかまた事件？」

「その通りです。詳しい話をしたいんですけど」

仕方ない。どうせ僕に解けない事件はないのだから。

まずは、ロスの推理力を見てもらいたい。

「私の名前はロバート・チェンです。有名なロス様に会えて光栄です」

「まつ、座ってよ。なんかほんと最近ついてなくてね。そんな話は置いていて、どうぞ言って下さい」

「実は、事件は隣のループタウンで起こったのです。そこには美しい木、花、鳥。ご存知のようにすごく優しい町でした」

「うん」

ロスはうなずいた。

「そんな町にも工場はあります。その工場では、鉄を取り扱っています。その鉄を溶かしていたときにに事件が起こったんです」

「質問がある、その工場はどの辺にあるんだ」

「町の中です。もっとも人がいるかどうかは別ですが」

「どういこと？」

「その工場は煙を多く出します。だからその辺の住民はどこかへ数年前にほとんどでていってしまいました」

「なるほど、殺害方法について分かっていることはありますか」  
「どこからか叫びが聞こえてきました。それはすぐに溶炉からだと分かりました」

「うーん、なるほどそれ以外は分かっているはずですよ。仕事  
中だったんでしょ」

「はい、でも一つ分かっていることがあります。誰もいない町では  
従業員以外は殺害不可能だと」

「確かにこの事件の様子では溶けた被害者が自分からやったと言  
いづらいから……、考える時間をもらってもいいですか。－＋－は  
必ず二になります、そういうことを証明して見せますよ」

「ほー、楽しみですね」

「あの今日はお一人で？」

「いえ、馬車に連れが一人、ループタウンの友達ですよ。気分が悪  
いんだとか」

「今度は是非そのお友達ともお話しさせてください。今日は以上です」  
「ありがとうございます。さて帰ったら何しようかな」

幼い心をもっているいい人だったなあ。確かに怪しいが。

この事件の依頼をしてくるということは、おそらく被害者の知り  
合いの知り合いかその辺だろうな。

シャーロックホームズ、その名にふるえが止まらない。そんな小  
説を読むのが趣味のロス。もうだいぶ日が暮れてきた。

「毎日寝てるわけにはいかなからなあ」伸びをした。「僕は世  
界一の探偵になりまーす」彼の家は三階建て後屋上。立派な事務所  
だ。普段は眠いから書斎にいるが、今は屋上にいる。考え事るとき  
はいつも屋上……。

「プスン」ひらめいた。

トリックは分かった。後は犯人の特定のみ。

翌日……。

「ガランガラン」ベルが鳴る。

今日は運命の日。

「あつロバート君、もう一人はループタウンの……お名前は？」

「シャルクイックです」

「よろしく、シャル君」

「そついやあ、シャルつて探偵目指してたんだよな」ロバートは陽気だ。

ロスを考えてみた。こんな助手がいたらと。そして……。

「探偵になりたいのなら、この町はどうです？ これを運命にしませんか」

「ロスさん、でもそれじゃきつかけがありませんよ。僕は運命なんて信じていませんから」

シャルクイックはそう答えた。それはシャルのプライドの問題だった。論理的に考えてロスもその答えに納得した。

「行きましよう、ロス。隣町ヘルプタウンへ」

「そうですよ、よかつたら私の家も紹介させてもらえませんか」

ロスは直感していた、シャルは優秀だと、いろんな悩みがあるのだと。

シャルクイック

18歳 探偵を目指してハーバード大学へしかし探偵になるきっかけをうまくつかめず今も現役の大学生だ

## 探偵のさが（後書き）

面白かったですか、よければ続きも書きたいです。

犯人は……

依頼が来て数日、ロスは隣町ループタウンに調査に行くことになった。

仲間になった助手シャルクイックとともに、謎に挑む。

「ロバートさん、この辺がループタウンでしょうか」

「はい」

美しい町だった。古風な様子が僕の心を癒した。

「きれいな町ですね」

そう言うとロバートさんは補足してくれた。

「もつじきこういう風景が見れる場所も少なくなってくるでしょう」

「わかります。あの工場が問題なんですね」

「いえ、違いますよ」

「えっ？」

僕は不思議に思った。

「都会からいろいろなものに移住してくるそうです。そうになったらあの工場も移動せざるおえません」

「事件現場まで案内してくれますか」

深刻な話だった。誰が見ても美しい景色が、開拓によって汚されてしまうという。

「シャルクイック！ お前が説明してくれないか。詳しい事件の内容を」

「了解しました。私はロバートの友人ですが、その日はその工場に遊びに行っていました」

「はい」

「それでその工場で見たんです。溶解炉の前で死のうとしている姿を、最初は何をしようとしているか分かりませんでした、その数秒後にガイシャは落ちたのです。今頃気づいても遅いと感じたので誰

にも言いませんでした」

すべてわかった。

「謎は解けた」

「本当ですか」

「後は現場に行けば分かることですね」

ロスには何もかも分かっていた。舞い散る落ち葉にロスの顔が隠れた。

「ここです」

「なるほど」

ドアを開けた。「ガッシャン」

推測だった推理が真実が変わった。

「ロバートさん推理シヨールをします。容疑者を集めてください」

「はいっ」

みんな集まった。

「では、この事件をふちどっているのはこの工場でした。そしてこの土地の人はすでに去ってもういない。そんな環境でした。僕が気になったのはドアの音です、工場というものはドアは閉まるとき「ガッシャン」となるものです。そして溶解炉の位置……ドアの目の前の上のほうにありますよね。だから犯人は！」

「ゴクツ」ロバートはつばを飲んだ。

「シャルクイック！ お前だ」

「なんだと」

「あなたは自首してしまっただんです。罪の意識が潜在的に現れてね」「どういうことだロス」

容疑者も真剣に話を聞いていた、もちろんシャルクも。

「あなたは僕を試していた。推理はこうです、自殺者は物音に敏感なものです。だから誰かが来たら隠れるでしょう。でもあなたはそんなことは一切私に伝えなかった。ということはその話自体が工作だったんです」

「どういうことだ」

「静かに閉めたんだよ」

シャル「クイツクは否定する。」

「それならあなたは『ガイシヤは死のうとしていた』と仰いましたよね。それは犯行を隠すための言い間違いです」

「初めからガイシヤは死のうとしていなかった。ただその中を見ていたんです、黄昏てね」

ロバートが口を開く。

「じゃあ、黄昏ていた被害者をシャル「クイツクは巧妙な話で突き落とされたのか」

「もちろんです」

シャル「は泣きそうだった。」

「どんな話で釣ったかは知りませんが、犯行ができたのはあなただけだシャル「クイツク！」」

「そうだ、ツフフ僕が考えた巧妙なトリックだ」

「はっ、口先だけでここまでごまかせる犯罪者がいたとはね」

「でも、ばれましたよね。僕は確かめたかった。人間の強度を、誰もしなかったことがしたかったんだ」

「よく言えば探偵向きだ。でもお前らしくないことだったな」

「ハッどうして」

「お前は優秀な大学にいたろ、だからその学校に詳しい話を聞いたんだ探偵として……. そしたらお前は命を救った優秀な生徒だってことが分かったんだよ。こつちが聞きたいどうしてこんなことを？」

「探偵になりたかった、それだけだ」

「おとなしく逮捕されてもらう」ロバートが最後の言葉を締めくくった。

「いつかオレの助手になれ」

「おっ」

シャルは親指を立てた。

天才が犯罪者になるとこのようになりかなり巧妙は口実を作ってしまうのです。

僕はそんな奴にもいいところがあると知った、そう感じた。

誰もが天才なわけではない、凡人の僕にも天才の気持ちが分かったのだから……。

犯罪は悪だ！

一年たった。

裁判では自殺目的のガイシャを後押ししたというだけなので、一年で済んだ。

新しいスタートで物語は始まる。

犯人は……（後書き）

いじめの話題は次話

## 旅出

シャルルクイックが釈放されて三日。

わからないことだらけだ。

僕に来た依頼は尋常なものではなかったからだ。

あの溶解炉事件からの一年で僕はかなり有名な探偵になった。クレーザー街でもナンバーワンだ。

「コンコンカランカラン」

玄関で呼び鈴がなっているようだ。

次の事件はなんだろう。

「シャルルじゃないか、久しぶりだな」

「シャルルクイックは確かにロス探偵事務所に釈放した」

「お世話になりました」

シャルルは変貌していた、少なくとも前のシャルルじゃなかった。

「どうしたんだ敬語なんて使って」

「どうしたもこうしたもないよ」

「どうしたんだよ」

ロスは困った、こんなときにすべきことがまったく分からなかったからだ。

ロスは電話をかけた。クレーザー街警察署に……。

「警視總監のトックさんいますか」

「トックさんは今は事件で忙しいのです、お名前を聞いておいてもよろしいですか」

「ロスです」

「分かりました」

病気のようにイスに座っているシャルルを励まして、話題を変えてみた。

「いままでは僕は自分のことしか考えてなかった、でも今は違う」

「何が言いたい」

シャルⅡ独房は予想以上に悲惨だったようだ。その心の闇を取り除ける警察の人間を僕はあたった。名前はルース・トック、警視総監だ。特に学校問題を担当している優秀な奴でこれからはお世話になりそうな人物だ。

ロスという名前の響きのせいだろうか学校問題についての依頼が最近多い。ロスという名前の響きのせいだろうか。わからない、でもきつとわかることもある。

「クイツク、これ以上ひねくれてもしょうがないだろ。お前の分の重みは僕が全部背負うから元氣出せよ」

シャルⅡはクイツクと呼ばれたことで心境が変わった。

「確かに」笑っていた。「それならオレも頑張れるかも」

こうしてシャルⅡとロスは心を打ち溶かし、もう一度戦うことを決意した。

童貞探偵ロス、元犯罪者探偵シャルⅡクイツク助手、二人のコンビでもう一度。

「シャルⅡ、荷物の用意を早くしろ。そろそろ列車が出る時間だ」  
「そうかい」

シャルⅡはめんどくさいことが苦手だということが分かった。でも才能はある。

「そこにランプがあるだろ、それを持ってきてくれ。夜にもいろいろやることもある」

いましているのは旅の支度だ。まだ事件とは呼べない未事件に挑むという大偉業をなそうとするロスの計画だ。

「えー私の推理で行きますと、列車は後三十秒後に出発するでしょう、えーはいー」

もちろん駅は近かった。

「シュワツァーシューツ」

列車が出発する音がした。

「どうしてそんなことがわかったんだ。腕時計なんて高いものは持つてないだろ」

「これが僕の能力とだけ言っておく。体内時計能力かな」

「へえ」

これから先のことを考えてみた。列車に乗ったのはいいが何をすればいいのか分からなくなるといふことはないだろうか。まずしなければいけないのはどうやって社会問題をなくすか考えている学者さんに会いに行くことだ。

ヘイルル教授、ガイハハ教授、セルミナク先生、まずはこの三人だ。

そんなことを考えていた。

「行きますよ、ロスさん」

「承った、行くぞ」

駅に着いた。近くて助かる。日々の疲労が取れるのが駅内足湯だ。足湯につかる時間があつたので非常にすがすがしかった。

「後五分だよ」

「了解」

シャルⅡはめんどくさい足湯が嫌いらしい。

僕は足湯をたたみ、まっすぐ列車の入り口に出向いた。

「さすがシャルⅡ列車の色とおそろいだ」

シャルⅡの服は赤だった。

「変なところに気がつくね、ロスの灰色の服はポワロみたいでかっこいいのね」

シャルⅡはこういふところですからすぐ傷つく、もう少し頑張っ

てほしい。  
「ドンマイ、列車とおそろいも気分的に楽しくなるもんだぜ」

こうして短くも密度の濃い、新たな旅が始まった。

推理しよう、これからのことを。

このときロスは約束した、シャルⅡを救うと。

「もしもしトツク警視總監ですね。シャル」と代わります  
「精一杯楽しめよシャル」、天才なんだし。

旅出（後書き）

遠慮ない感想を！

## 宿の娯楽

「ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン」

列車の中は快適で涼しい、氷がたくさん置いてある。

「シャル」これはあることを学ぶための旅だってことは分かってるよね」

「それは教授に今起こっている謎の事件の研究書見せてもらうための旅だろ」

「疲れたから寝るよ、あと四時間も列車だからね」

「まったくどこに行くんだよ」

列車が到着。

「ここはマスイー市、お降りの方はすみやかに降りましょう」

「眠い」降りた。

「確かに」シャル」が降りた。

「どうやって行くか」

「どうやっていくんだらう」

「さて、歩くか」

「歩こう」

僕らはこれからセルミナク教授にいじめを教えてください。そういう研究をしている人だからだ。

何を言われるかは分からない、でも信じる道を行けと思った。

「シャル」会話することがないな。この辺は殺風景だ」

「そういうことをしゃべろうよ」

「そうだな」

何時間歩いただらう、コンパスで方角を確認しながらすすむに進んだ。

もうあっという間に夜になったので、僕は宿に泊まることにした。

「あ、ちょうどいいところに宿だ」

「そうだね、ロ」

「だな、シ」

何もかもがめんどくさかった、シャルのその気持ちがあった。

「せっかく休む時間があるんだ、会話でもしようよ」

「ところでロス、いじめを攻略する方法はいかが？」

「百円」

百円を出すロス。

「サンキュー、それは自分を演じることだ。それで一度はいじめを攻略したことがある。それと相手の分からない分野の会話をするのも手だ」

「五百円」

「最後だからな、脅しって言うのはどうだ」

「脅し？」

「やってみな快感だぜ」

「君の考え方が分かってしまうよ。もっと効果的なことを思いつく人は存在するのだろうか」

「知らないな、おっ寝たのか」

シャルⅡの言ったことは難しいかもしれない、でもこれが効果のあるものだったとしたら、僕たちは思い違いをしているのかもしれない。

「おはようございます」

「おはよう、シャルⅡ」

眠そうにしている二人は同じことで悩んでいた。

「セルミナクさん！」

「そうですけど」

実はその宿のカウンターでバイトをしていたのがセルミナクだったのだ。

「やっぱりそうでしたか、この宿は女しかはカウンターにいないは

ずだそうだ。でもそこから調べてみたあなたはこの街では神並みの権力をもっていると言ったことが分かったんですよ」

「できるフフ。できるねフツ。それだ僕がセルミナクだ」

新しいことが起きる、そんな雰囲気だった。

追伸

「では、この街に来た君たちに本当のことを教えよう。わが事務所に来てもらうよ」

「そのつもりですセルミナクさん」

「そうです」

いじめを攻略できるのか……、舞台は日本に移る。

## 宿の娯楽（後書き）

ロスとシャルル＝クイックのコンビネーションをあげていくつもりです。読者の皆さんありがとうございます。

## テズ現る

クレーザー街で今も研究を続けている二人。

この町でかなり有名になった。

犯罪の天才がいるのなら、いじめをする犯罪者がいるのなら、僕らはモリアーティー教授のような人と戦わなければいけないのだろ  
う。

最後に勝つのは僕か、奴か……。

幾多のときが流れた夏、ロスは二十歳を迎えた。

「うわーあ、なんだこの新聞に載っていることは……」

「いじめを裁くキラ、通称テズ……頭文字T」

「ロス！ これは一体どういうことでしょう」

「テズつというのは一体なのなのか、キラとの違いは……」

ふと、シャルは現実を疑った、この世界が本当に本物なのか。

## 記事

心臓麻痺以外の殺し方を使う、このTは相当頭がいいと思われる。脳内解剖で脳の重要部分が陥没していることを発見した。この殺し方を遠隔でできるなら、我々はいつ殺されてもおかしくないだろう。

「おいこつちの記事を見てくれ」

「どうしたんだロス」

## 記事

天才現る、株角。学力テストで一位を獲得、インタビューしま  
した……。

「関係していると思わないか」

「そうでしょうか」

ロスに反論するのがシャル」のできることなのだ。

「偶然が重なることは危ないことです」

「そうかな、これは新聞記者の頭のいい奴が作った暗号なのかもしれないぜ。テズに知られるとやばい情報がここにあったわけだ」

一瞬ためらったがシャル」は一言。「すごい、やっぱりロスはすごい」

こうしてロスとシャル」は日本へと飛んだのだった。

追伸

「日本の文化は最低だね」

「確かに、でもこれほど科学技術が発達しているなんてな。初耳だ」  
「見ると21世紀並の科学技術が発達していた。ロス、これはおかしいぞ。この時代は中世なのに。まさかタイム・スリップ？　じゃああの新聞はどういうことだ。」

隠し情報　これは現代のテズのやったことなのかも。

## テズ現る（後書き）

感想書いてくれよ。まじで書いてくれよー！。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0586f/>

---

愛とまことのストーリー

2010年10月14日20時30分発行